



野生の鳥を勝手にとったり飼ったりすることは法律で禁じられています。

ヒトは野のトリを籠のトリにしてよいか

野のトリは あるがままの自然の中で、目まぐるしい現代の社会に生活する私たちにとって、野生のトリたちの姿を見たり、さえずりを聞いて楽しむやよろこびをおぼえることは、気持のうえでも大きなうきおいになり、生活そのものを豊かにしてくれます。

野生のトリのすみ場所を考えるとき、そこには他の生物—それは植物だったり、虫だったり、いろいろな動物だったりします—が、何かのかたちで、トリたちといっしょに生活していることは、もうご存知でしょう。こうした場所、つまり自然界には、いろいろな生物が、さまざまな生活をして、おたがいに関係を結びながらすみついています。この関係がうまくいって、いれば、自然界は、バランスのとれたよい状態にあるといえます。ですから、トリにとってよい環境というときは植物や虫や、他の動物たちとのかかわりをふくめて、考えなければなりません。

ここに、おそろしい事実があります。ヒトが、たくさん木を切ると、すみ場所を失ったトリたちがいなくなり、虫がいなくなり、動物がいなくなり、ヒトが、トリをたくさんつかまえると、虫が大発生し、木が枯れ、ヒトが、害虫を除く薬をたくさんまくと、薬の影響でトリも死に、他の動物たちも死に—。自然のバランスをくずすことは、自然の一員であるはずのヒトの生活もまた、おびやかされるといこうにつながるのです。

「愛鳥」の精神を考える
野生のトリは、かわいいものです。自然そのもの、だからです。自然の一員としての役目を果たしているトリを、自然の一員のヒトが勝手に捕え、籠に入れてよいのでしょうか。

「愛鳥」の精神とは、トリを籠にじこめるのではなく、あるがままの自然の中で、トリたちに自由な一生をおくらせることであり、そのための自然を、ヒトはもつればなり、こわさないように努力していかなければなりません。

「愛鳥間」は、トリたちに対する正しい理解と、自然保護についての関心を高めていたための行事です。「愛鳥の間」というものは必要ありません。自然の姿はない、まだまだ大自然保護の先達Vとはいえない日本だからこの行事ではありますが、みなさんのひとりひとりが、毎日毎日、ボード・デーのつもりで、トリたちにあたたい心を寄せてくださるようお願いいたします。

工業先進国の誇りのかけで、日本がいままで文明後進国である必要はないはずで。



「ヒトの心がトリの保護区」

財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の協力を得て、サントリー株式会社によって制作されたものです。